フォークスロア

安藤ナツ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
フォークスロア

【Ｎコード】
Ｎ００６３Ｗ

【作者名】
安藤ナツ

【あらすじ】
フォークスロア。
『知識』『伝説』都市伝説』『民間伝承』

鳥の歌

人畜無害極まりない、何処のクラスにもいる教室の隅にいるような、本を読んで昼休みを過ごすような、十把一絡の存在であった僕の話をしようと思う。高校三年生の春休み、僕が僕でなくなり、僕が僕を確立したと言えるあの春休みの話だ。思い出すだけでも背筋が凍り、自らの眼球を抉りたくなるような衝動に駆られ、あの体験をしなければ僕は一体何度死ぬことになっただろうかと感謝をささげ、よくよく考えてみればこのことがなければ僕がそんな目に合う必要もなかったと後悔する、そんな間抜けな僕の話だ。誰かに話せば鼻で笑われてしまうような話で恐縮だが、聴いてくれると嬉しいと思う。

鳥の声で始まり、鳥の声で終わる。僕がこの日体験した怪異は、一言で言えばそれだけのことだ。だから、僕の話を聴く前に鳥について少しだけ下らないことを話そう。

鳥は様々な伝承にもその姿を現す有り触れた神格の一つと言える。日本で言えば、サッカーのシンボルとして有名になった三本足の八咫烏が有名だろうか。世界に目を向ければ、再生を司るフェニックスに、魂をむさぼるフレスベルク、南方を守る四聖獣が一柱の朱雀。もっと広義に鳥を解釈すれば、世界中の神話には翼を持った生物がうじゃうじゃと存在する。神の使いである天使にすら翼があるくらいだ。

これらを偶然の一致と考えるには話が出来過ぎている。人類は太古から彼ら――敬意を払って彼らと言わせて貰おう――に憧れているのだ。人間がどんなに願っても舞うことのできない空を自在に動くその姿に。卵を自らの身をもって暖めるその母性に。幼い雛の為に餌を取り食事を与えるその慈愛に。

神話の中で、彼らの扱いが多岐に渡るのもそのせいだろう。決し

て進めぬ場所を突き進む彼らを自由の象徴とし、人間の足では行けぬ遠く離れた大地を見下ろすことに異界への導きとして。尊敬と恐怖を混ぜた存在として、彼らに人類は憧れていた。
それでは、彼らは人間のことをどう考えているのだろう？　繁栄を極め、異常を制した人類を見て、彼等は何を思ってくれるのだろうか？
僕が聴いたのは、そんな鳥の声だった。

輝叔父さん――棚町輝和――が自殺をしたと聴いて、僕は酷いショックを受けた。二十歳の離れた眼鏡と無精髭が似合う輝叔父さんとの交流を僕は日常的に行っていたため、勝手ながら友人や兄と言った身近な親愛を、僕は輝叔父さんに感じていた。
しかし周囲の人間が僕と同じ印象を受けていたかと言うと、それは違った。むしろ周囲の大人たちは、輝叔父さんのことを軽蔑し、ああ言う大人にはなるなと口を揃えて僕に忠告をするほどだった。その意見は僕も認めざるを得ない。どう頑張っても、僕は輝叔父さんのようにはなれないのだから。
勿論、その言葉に輝叔父さんを否定する意味はない。子供の頃に見ていた朝八時の特撮ヒーローになれないのと同じ意味において、僕は輝叔父さんのようになれないと確信していた。
輝叔父さんは定職に就かず、怪しげな生物を飼育し、謎の薬品や二束三文にもならないようなガラクタを集め、世界中の秘境を回っては友人を作っていた。自由の語源はこの人のことなんじゃあないだろうかと、何度も思ったくらいだ。しかも資金面において親戚の誰かに頼るようなこともなく、むしろ金持ちと言える部類だっただろう。一体何処から金銭が湧くのか不思議で堪らなかったが、道楽だと思っていた生物やガラクタを、広いコネクションを使って販売したり転売したりしていたようだ。輝叔父さんはそんな自分のことを比喩交じりに『錬金術師』と呼んでいた。

そういう飄々として常識に縛られていない輝叔父さんのことを、世間は『遊び人』だの『甲斐性なし』だの言っていたが、きっとやっかみだろう。世間一般で言う常識に従い、真面目に生きている人間よりも、自由に気ままにそれでいて自分の意思で楽しんで生きている輝叔父さんが眩しくて、妬ましかったのだろうと僕は思う。

憧れながらそれを憎むとは、大人と言うのは忙しい。ゆとり教育を受けていないから、ああも心に余裕がないのだろうか？　きっと、最近の若者であれば、誰もが輝叔父さんに憧れるだろう。

そんな輝叔父さんが自殺したという話はまさに寝耳に水で、最初は何かの冗談かと思った。自殺と言う言葉からもっとも縁遠い人間だと信じきっていた輝叔父さんの自殺は親戚中に波紋を呼んだ。死因はまだ高校生である僕に知らされることはなかったが、輝叔父さんの死体はすぐに火葬され、葬式には遺骨が置かれていた。父が言うには、恐ろしい表情で顔が固まっていて、とても人前に出せるものではなかったらしい。そして、死体を見たという親戚は、誰一人この葬儀には参加していなかった。厳格な父ですら、式には出ずに自宅の布団で寝込んでいるほどだ。

ガラガラ蛇を素手で掴んだり、チキンレースに参加して若者達のヒーローになったりしていたあの輝叔父さんがそんな表情をするなんてにわかには信じられず、僕は腑に落ちないものを感じながら、物言わず原型すら失った輝叔父さんに最後の別れを告げた。遺影に選ばれた輝叔父さんの表情は、いつもの子供のような笑みだった。葬儀は子供の頃感じていたよりも早く終わり、親戚一同は大きな和風の飲み屋に流れて言った。生前、輝叔父さんは騒がしいのが好きで、いつも愉快そうにしていたから、別段飲み会が開かれることに抵抗はないが、親戚達の酒の肴が主立って輝叔父さんの奇行だと言うことに僕はうんざりした。その癖、輝叔父さんの残した遺産について浅ましく話していりのが許せなかった。

輝叔父さんは近くの山を三つほど持っていた。その奥にはこぢんまりとしながらも、立派な屋敷を構えていて、それらを売れば幾ら

になるのかと、祖母（つまり、輝叔父さんの母親）は親戚の人に相談したり、取らぬ狸の皮算用をしたりしていた。と言うか、祖母は輝叔父さんの最後も見届けてないのか。放任主義の極みのような人だな。

それはさておき、僕としてはあの監獄のような屋敷には幾つか思い出があり、できれば輝叔父さんが残した遺言のような物がないか探してみるつもりだったので、不都合な話であった。しかし高校生である僕は、遺産と言う経済的な話題に入る勇気はなく、指を咥えて見ていることしかできなかった。

そして部屋の隅で出された刺身をつついている内に、僕は輝叔父さんと一番仲が良かったことから、面白い逸話がないかと酔っ払いどもに絡まれ、彼らを満足させる話をすることになった。

受けが良かった話を幾つか記すと、先程も言ったチキンレースの話、オウムにコントを仕込んでネット上に上げたこと、二メーターを越える女性の友人の水着画像等があった。逆に、南米の食虫植物の捕獲シーンや、幽鬼が描いた絵画の画像、アフリカに住んでいた呪術師が呪い殺された話の評判は悪かった。

もっとも、皆が興味を引いた話は、やはり輝叔父さんの資金源であり趣味であった、大抵の質問は「それは高いのか？」と言う下卑た物だった。中世の錬金術師バイ・ジンの書いた『恋慕呪術書』のドイツ語の写しや、『ネクロミノコン』『千寿死骸覚書』のラテン語の一部、エジプトの古代文明の碑文のレプリカ、湿原に住む爬虫類とも哺乳類ともいえないキト・ヤートが数匹、本物のクルセイダーソードが一振り、平安時代の歌人大江定永の鬼神を描いた掛け軸があると教えると、その価値もわからずにそんなことを問うのだから、辟易せざるを得なかった。

話をする内に、酔っ払いは盛り上がり始め、祖母さんが屋敷の物の価値もわからずに捨ててしまう前に、どうにかそれらを所持することができないかと言い始めた。輝叔父さんの蒐集品を売り払うのは論外だが、それは僕にとっても魅力的なものだった。今現在、あ

の屋敷について最も詳しいのは他ならぬ僕だろう。週に一回は学校帰りに訊ねていたし、土日を丸々あの屋敷で潰したこともある。輝叔父さんが旅行中には、奇妙な生物の飼育を頼まれたことも記憶に新しい。夏休みの半分以上はあそこで寝泊りしていた。

僕は酔っ払いに背中を押されながら、祖母の元まで行くと、あの屋敷には貴重な物、歴史的な物があることを強調して説明した。祖母は中々首を縦に振らなかったが、最後にはあそこで買っている動植物の命を人質に取り、今すぐにでも山と屋敷を売り出した祖母の口から、二週間の猶予を貰うことができた。それだけあれば、学校の友人達や親戚の叔父叔母を利用して大抵の物を持ち出すことがなんとかできるだろう。

問題はあの強欲な親類の手からいかにして輝叔父さんの蒐集品を守るか、と言うことと、保護した蒐集品を何処で保管するのかと言うことにあった。

僕の父親は真面目なことだけが取り柄の堅物であり、新築したばかりの家に禍々しい名前の古書や、奇怪な生物を置くことを許してはくれないだろう。そもそも、キト・ヤートやクルセイダーソードは所持するのに法的な手続きは必要ないのだろうか？

様々な問題が山積みではあるが、僕は深く考えることを辞め、目の前の料理に集中することにした。一先ずは目処が立ったことだし、詳しくは後日考えれば良いだろう。輝叔父さんの友人の中には何度か面識のある人達がいて、彼らなら快く協力してくれるだろうと言う妙な確信もあった。

その確信は見事現実となった。しかも僕にとって限りなく好都合な方向に、事態は転がっていた。

翌日、親戚の叔父叔母連中と連れ立って、山奥の輝叔父さんの屋敷に出向いた。正式な人数は覚えていないが、車三台に別れて乗車していたので、十人を下回ると言うことはなかっただろう。

幾ら田舎の山奥とは言え、輝叔父さんが日常に暮らしていた家で

あり、砂利道ではあったが特に迷うこともトラブルもなく屋敷に着くことができた。輝叔父さんの趣味なのか、わざとみすぼらしく作られた牢獄のような面構えは、誰かを歓迎しているようには見えず、何人かは不気味だと嫌そうな顔をしていた。葛が蔓延る城壁のような壁の素晴しさがわかったのは、この中では僕だけのようだ。

普段から鍵のかかっていない屋敷の門を開け、ぞろぞろと連れ立って庭を歩く。テニスコートが四面は並ぶ大きさの庭には、所狭しと世界各地から取り寄せた、或いは模倣したオブジェや建造物が並び、それは一種の魔境のようで僕のお気に入りだった。特に、カナダの先住民の霊的シンボルである滑稽な顔をした鳥の彫刻は輝叔父さんのお気に入りであり、僕もまたあの間抜け面が好きだった。そう言えば、輝叔父さんは鳥類に対する執着心が特に強かったと思う。

庭の中心に造られた五行を象った溜め池の魚が一匹跳ね、その肴のグロテスクさに、従姉の一人が悲鳴を上げた。未婚の若い従姉は、叔父の家を捜索するには向かない、全体的に露出が多いミニスカート姿で、僕の話を聴いて簡単に大金が稼げると意気込んでいたが、庭の魔性と、魚の冷たい瞳に、もう帰りたいとぼやいた。

僕は適当に従姉を慰めると、先に行くように促した。二週間と言う限られた時間を有効に使うためにも、物の価値がわからず、それでいて短慮な従姉のような人間は絶対に必要だった。今日は、一般にも売っているような価値の低い物を親戚一同に回し、後日価値のある物を学校のオカルトに興味のある友人一同と分け合う予定だった。できれば、遺書やメールのような物を見つけたいとも考えていた。

バスガイドよろしく、庭にあるものの由縁や意味を説明しながら庭を横断すると、僕は重々しい雰囲気の扉に鍵を突っ込んだ。開方向に鍵を捻る。と、鍵には手応えがなく、首を捻る。そのまま冷たい鉄製のドアを捻ると、鈍い音を立ててドアが外向きに開いた。

「鍵。かけてなかったの？」僕はあまりの無用心さに、咎めるような口調になりながら祖母に問うた。幾ら価値を知らないとは言え、

こうも無用人だと軽蔑の念を覚えずにはいられなかった。
「さあ？　私、ここに来るの初めてだもの」
　しかし祖母の口から出た言葉は、僕の予想の範囲外の言葉であった。聞いてみれば、輝叔父さんはここで自殺したわけではないらしい。この山の麓に近い場所で首を吊って死んでいたそうだ。父は恐ろしい顔をして死んでいたと言ったが、首吊り自殺とは、そうも恐ろしい死体になるのだろうか？　そうであるなら、僕が自殺するとしても首吊りだけはやめておこう。それにしても、近所だと言うのに息子の家に一度も訪れたことがないとは、祖母は輝叔父さんのことをどう思っていたのかがわかる一言だ。
輝叔父さんに若干の同情をしながら、僕は扉を限界まで開けると、全員に入るように促した。薬品や動物、そして芳香剤の混ざった混沌とした匂いを鼻腔に感じると、いよいよ輝叔父さんの家に来たのだと実感できる。全員が口を揃えて匂いに対して苦情を入れたが、こればかりは僕も好意的に解釈できない。輝叔父さんがここで暮らしていた以上、生活できないような匂いではないのだが、例えようのない存在感があり、どうしても気になってしまうのだ。しかしそれでも慣れてしまうのが、人間の恐ろしい所だろう。
拾い玄関には下駄箱がなく、代わりに幾つかのダンボールが無造作に置かれている。早速、祖母や従姉連中がそれを漁り始めたのを見て、僕は溜息を吐く。どう考えたら、鍵もかかっていない玄関のほこり被ったダンボールの中に貴重な物をしまっておくのだろうか？
　しかも手当たり次第にそばにある物から、ゴミ箱を引っ繰り返すよりも乱暴な手つきでだ。貴重品を探すという気が微塵もない。事前には僕の言う通りに行動するとか殊勝な態度で言っていたのに、それすら守る気もなさそうだ。この様子だと、何が入っているかわからないケースでも、風化や酸化の恐れを気にすることもなく開ける公算が大きい。金銭でしか物の価値が理解できない人間と言うのは恐ろしいものだ、なんてこの場で言ったら、年上の親戚達はどんな表情をするだろうか？

「失礼ですが。あなた達は泥棒ですか？」
玄関の奥から、良く通る声が聴こえて来たのも、丁度僕がそんな風に親戚連中の背中を見ている時のことだった。突然の登場に、ダンボール漁りに夢中になっていた親戚達は、現れた若い女を恐怖と怪異の混じった瞳で見ていた。
長い黒髪に、時代錯誤な花柄の着物を着た彼女は、森嶋近衛さんだった。僕も何度か会ったことのある妙齢の女性で、輝叔父さんの友人の一人だ。輝叔父さんの葬式にも顔を出していたので、親戚の中には彼女の顔に見覚えのある人もいるようだった。
しかしそのことが輝叔父さんの屋敷に当然のようにいる理由になるわけもなく、誰も何も言わないことに見かねて僕は口を開いた。
「こんにちは。近衛さん。屋敷を僕達は輝叔父さんの遺書を探しに来たんだ。ほら。輝叔父さん、何も残さずに死んじゃったからさ」
右手を上げて、いつものように挨拶を交わす。この家を訪れた理由だけは少々でっち上げた。流石に、家探しをしに来たとは言えなかった。近衛さんは、その理由に納得したのかしていないのか、適当に頷いていた。
「こんにちは。薫君。相変わらず若いわね」一回り以上歳の離れた近衛さんは、いつものように僕の若さを睨みつけるように言った。
「オジサンのこと、残念だったわね。良いわ、貴方なら間違いないでしょうし、屋敷を探すのを許可します」
「貴女。どうしてここにいるの？　ここは輝和の家よ？」
一体どうして輝叔父さんの家を探すことに近衛さんの許可がいるのか、僕が不思議に思い訊ねる前に、祖母が口を開いた。その口調は刺々しく、殆ど初対面の近衛さんに噛みつくような物言いだ。彼女のことを泥棒か何かと信じて疑っていないようだった。土足のまま玄関を上がると、近衛さんの方に歩いて行く祖母の後ろ姿に、何度目かの溜め息が出た。
「どうしてって、ここは元々私の父の家だからよ。父と輝和さんは友達でね、彼が家を探していると言うことだから、父が周辺の山と

一緒に貸したのよ。彼が死んでしまったから、私が引き取りに来たわけ」
腰に手を当てて、諭すように近衛さんが言うと、祖母が顔を真っ赤にして反論した。感情に任せた言葉は聞くに堪えず、僕の口から説明するのは憚られるので、要約すれば『証拠を見せろ』『輝叔父さんの物は私達が全て貰い受ける』『さっさと出て行け』の三点だった。それだけのことをたっぷりと時間をかけて言う内に、他の親戚連中も同じように祖母の意見に同調し、収拾がつかない程の盛り上がりを見せていた。
近衛さんは多少困惑したようだが、彼女達の目的が歴史的価値のある輝叔父さんの収集品だとわかると、袖から携帯電話を取り出し、何処かに電話した。電話の内容は定かではないが、彼女が何を口にしたのかは、五分も経てば理解できた。
五分後、屋敷の重々しい扉を開けて登場したのは、近衛さんの父親である森嶋大将さんだった。地元でも有名な資産家であり、元神知教の研究者でもあることで有名な彼は、白衣を来た巨体を揺らしながら、僕にゆっくりと頭を下げた。
「久しいな。薫君。輝和の葬儀に出られなくて大変申し訳なった」
白髪交じりの髪をオールバックにした大将さんは、他の面々にも同じように頭を下げると、ここが自分の持ち物であり、輝叔父さんはここに置いてある貴重品珍品の管理人として雇う代わりに、この屋敷を貸したのだと丁寧な口調で説明した。輝叔父さん、働いていたのかと、自殺したことよりも大きなショックを受けた。先程した質問の大半が嘘になってしまったじゃあないか。
輝叔父さんが買った物についても、祖母にまとまった額を渡すからどうにか譲ってくれないかと頼み込んだ。最初は祖母達も嫌がっていたが、売りに出すにもそれなりのコネと労力が必要なことを僕が説明し、大将さんの示した金額の巨大さに快く納得してくれた。
更に大将さんは、ここの管理人を僕にやってもらうことはできないかと少々ぶっ飛んだことを頼み込んできた。輝叔父さんの集めた

物は節操がなく、叔父さんが死んでしまった今、この屋敷の物品を一番把握しているのが僕に他ならないからだった。給金は驚くほど高かったし、古文書等の翻訳も好きにできるし、更に高校卒業後一人暮らしの当てができて僕は一も二もなく引き受けようと思ったが、この場では取りあえず考えさせて下さいと返事を保留しておいた。堅物の父親と、子離れができない母親を説得することから始めないと、後々に禍根を残すことになるだろう。

大将さんは残念そうな顔したが、僕に屋敷を自由に訪れても良いと言って、一枚の名刺を差し出した。金属製のそれをぼくは財布の中にしまい、僕が管理人になるまでの間はどうするのか訊ねた。

「あ、それは私が取りあえず、やるつもり。って言っても、私は何もわからないから、取りあえず、暫く学校帰りにでも寄って貰える？　謎の文字で書かれた本とか、骨董品の目録作りとかもしてほしいし」

「ええ。平気ですよ」断る理由が無い。

普段の行いが良かったのだろうか？　この後も話はとんとん拍子に進み、親戚達は既にこの場に用はないとさっさと帰ってしまい、僕は近衛さんと大将さんと一緒に屋敷の中を見回ることとなった。帰りは、大将さんの車で送ってもらえるらしい。信じられないことに、運転手がハンドルを握る高級車に乗って帰ることができる。月曜日に、友達に自慢しておこう。

屋敷は調理場や一部の輝叔父さんの私室を除けば、その殆どが書庫や倉庫や保管庫や飼育室や研究室になっている。よくもまあ、ここまで手広く蒐集し管理できるものだと、僕は改めて輝叔父さんの異常さに驚いた。もっとも、高校生になってからは、輝叔父さんが旅行に出かける時に何度かこの屋敷を任されたことがあるので、管理だけであれば、僕になんとかできないレベルではない。流石に、蒐集や転売となると門外漢だ。輝叔父さんの友人にも、近いうちにメールや電話をする必要があることを頭の片隅に留めておいた。

三階建ての建物の内、使用していない部屋は一階に僅かしかない。

来客用の部屋ではあるが、どこか牢屋のような圧迫感を感じさせるのは、窓がないからだろうか？　一部屋ずつチェックをしていき、一番まともそうな部屋を見つけると、近衛さんはここには毎日通うことに決めた。それは手間なのではと思ったが、近衛さんは「私、暇だから平気」と笑顔で答えた。普段何をしている人なのだろうか？　大将さんの顔を見ると、子供の育て方に失敗してしまったことを後悔しながら、恥かしそうに右手で顔を隠していた。近衛さんの就職事情には触れないことを心に決めた。

一階を一通り見回ると、とりあえず地下に降りた。地下は基本的には飼育室が大量にあり、外の溜め池にいた珍魚とは比べようもない、貴重な生物がそれぞれの部屋に飼育されていて、それぞれの部屋から、空調の音が聞こえてきた。

階段を下りた一番手前の部屋の扉を開けると、二人に素早く入るように促す。部屋ごとに適温を保っているため、開けっ放しにしないようにと、近衛さんに説明した。取り出した携帯でメモを取っている所を見ると、この仕事に対する意識はそれなりに高いようだった。

「でも、どうしてここの管理や、輝叔父さんの蒐集を後援するんですか？」部屋に置かれた七つのアクアリウムの温度と餌の量を確認しながら、大将さんに訊ねた。「ここの空調の維持費だけでも大変だと思いますけど」温度も餌の量も問題なし。一応、昨日一日の温度推移を確認したが、おかしなところはない。唯一つおかしなことは、この水槽にいる魚が水中にいる限り肉眼で確認できないことだろうか？　元気なのかどうか確認が取れない。が、死んだら見えるはずなので、生きてはいるだろう。

「ここの研究成果に比べれば、この程度微々たるものだよ。輝和はここにある膨大な試料を纏め上げたり、不可思議な生物の特性を見抜いたり、骨董品の修繕をしたりし、それを私や他の人間に回してくれた。その研究が世間の役に立つかどうかはわからないが、彼の働きは値千金の物ばかりだ」

輝叔父さん、凄い人だったのか……。しかし、そんな人の後任に僕を選ぶその神経を疑わずにはいられない。
「何言っているの、研究報告に君の名前も沢山あったわよ？　手伝っていたんじゃないの？　『天解文書』の目指すべき領域の一章翻訳とその概要。あれ、君が書いたんでしょ？」
でしょ？　なんて小首を傾げられても、研究なんて壮大な言葉には覚えがない。そりゃあ、夏休みの研究と称して、輝叔父さんの仕事（昔は趣味だと思ってた）を手伝ってレポートを書いたことはあったが、評価されるほどの物ではなかったはずだ。天解文章にしたって、肝心要の呪文のほうを翻訳できていない。
「それでも、十分凄いわよ。普通の高校生にできることじゃあない。それとも、自分のことを過小評価している？　君は自分が思っている以上に私達の間では有名よ？　あの変人が弟子を取ったって」
「弟子ですか」僕としては、あの輝叔父さんに師事している気持ちは全然なかったのだけども、やはり過大評価な気がしてならない。
「そうそう。君が設計したクルセイダーソード＝レプリカの使い勝手もかなり良かったし」
「使い勝手って、あんな鉄の塊を何に使ったんですか？」
「そりゃあ、主に叛く敵をぶっ殺すのに。目に見えない悪魔や支配者は本当にいるのよ？」
近衛さん、こんなキャラクターだったっけ？　もしかしたら輝叔父さんの死にショックを受けているのかもしれない。そういうことにしておこう。
全部の水槽の餌の具合をチェックし、水温に異常がないことを確認すると、部屋を後にした。その他の部屋も回り、同じ様に餌と室温のチェックをする。輝叔父さんが死んでから一週間経過しているとは言え、この程度の期間であれば、誰もいなくても機械的に餌が落とされるようになっており、特にこれと言った問題はなかった。危惧していたキト・ヤートも全員無事だったので何よりだ。この調子なら、二十四時間体制の観察カメラの確認も必要ないだろう。少

なくなっている餌を補充し、近衛さんに餌の購入方法と補充のタイミングを説明した後、僕たちは地下を後にした。階段を上りながら、大型の生物はいないので、近衛さんも一先ず安心しだと笑った。ただ、冷凍鼠にはドン引きしていたが。

一階は先程回ったので、足はすぐ二階に向けられた。二階は主に保管スペースであり、古書の翻訳や解読（勿論、お遊び程度ではあるが）の好きな僕が一番活用していた階であり、一番落ち着く場でもある。古書の分類も僕が殆どやったので、説明も容易い。基本的には時代ごとに分類したつもりである。あいうえを順だと、発音や翻訳者によって随分と位置が変わることがあるし、内容で分けるのは無理が大きかったからだ。昔の人間は手当たり次第にでも研究していたのか、記載された情報の幅が広過ぎる。それに、僕は本をジャンルにカテゴライズすることがあまり好きではなかった。

部屋を変えれば、妖しいミイラの一部や、奇怪な生き物の頭骨。巻物や掛け軸と言った日本風の物も当然多々ある。オーパーツ好きでなくとも見た事のある水晶髑髏が、近衛さんの目に留まったようだった。大将さんは一番最近の書物がある、つまり輝叔父さんと僕の書いた書類の保管室へと足早に歩いていった。

これらの部屋も当然空調が行き届いており、少し寒いくらいだった。この部屋の物は全てクリアケースに厳重に保管されているので、掃除は床やケースの周りだけでいいと説明した。「いや、私がやる必要もなさそうだし、もう若い娘を雇うわ。面倒だし。薫君はどんなタイプが好き？」先ほどの決意は何処に、ニートここに極まった発言だった。

「僕はあざといメイド服が軽蔑するほど嫌いなんで、普通に白いエプロンの似合う清楚な女の子がいいですね。フリル撲滅運動ですよ」一体、僕は何を言っているんだろう？

「胸は？」「大きいほうがいいですね」間を置かずに答え、僕たちは、無言で熱く固い握手を交わした。僕は、何をしているんだろうか？

「うんうん。良かった良かった。オジサンみたいに、研究に熱中しすぎて死んでいるのかと思ったけど、その心配はなさそうね」
　そんなことを僕は心配されていたのか。少しショックだ。まだ若いんだから、流石に興味はある。特に、同級生でありオカルト話のできる橘裕太と、その彼女の梅原祥子を見ると、壁を無言で殴りたくなるほどに感情が湧いてくるんだぞ。いや、沸いてくるのだろうか？　最近の悩みは、幼馴染との距離感がわからなくなったことだったりするんだ。卑怯なんだよな、高校入って急に女っぽくなりやがって。
「君の彼女欲しいアピールはわかった。落ち着け」
「すいません。取り乱しました」本当に、何を言っているんだろうか僕は？
「なんなら、お姉さんが慰めてあげようか？」
「二十歳過ぎても相手がいなかったら、お願いしますよ」どう返すのが正解なのかわからず、僕はどぎまぎしながら適当に返事をした。
「あー、その頃までには結婚してたいな」
　僕の言葉に真剣な表情で呟く近衛さん。二十歳でいきなり結婚はすこし勘弁して欲しいので、お手柔らかにお願いしておこう。そして、近衛さんの歳は僕の中で永遠の謎にしておいた。これからここに通う予定なので、会う機会も増えるだろうし、関係は良好にしておきたい。
　暫く雑談交じりにケースにしまってある物の説明をしながら、大将さんが奥の書類の保管室から出てくるのを待った。よくよく見てみれば、近衛さんの着ている着物の帯や根付には積み重なってきた時代が感じられる。
　そんな僕の視線に気がついたのか、近衛さんは意味ありげに笑う。
「わかる？」
「わかる、わからないで言えば、わからないですね。でも多分、和歌関係の呪術的要素が見えますね。平安時代くらいの物を、近代になってレプリカにしたものですかね？」

「うんうん。こういう古物の専門家じゃあないのに良くぞそこまで見抜いた。やっぱり、君はあのオジサンの弟子だよ」
「趣味の範囲ですよ。持ち上げられると、痒くてしかたがないですね」
「まあでも実際、私の父親とかは期待していると思うよ。稀代の錬金術師だったオジサンの後釜になれるのは薫君だけだろうし」
期待の錬金術知って所ね？　と最後に付け足していたが、僕は無視した。
「それにしても、少し意外って言うか、おかしいですよね、この屋敷」
今まで回って見てきた階の様子を思い出しながら、少し妙だと思い始めていることを近衛さんに説明した。それは、あまりにも普段どおり過ぎると言うことだった。
輝叔父さんが自殺したと聞いて、僕は収集品が破壊されていたり、ぞんざいな扱いを受けていたりしないかと危惧していたが、それが一つもない。まるで日常どおりであり、叔父さんが恐ろしい顔をして死んだというほどの狂気が、この屋敷からは感じられないのだ。そもそも僕は叔父さんが死ぬ三日前に会っているのだが、その時は至って普通で、怪しい薬品を混ぜながら、謎の機械を造っていた。とてもではないが、自殺をするような気配は感じられなかった。今思えば、そもそも自殺したと言う設定に無理が有る気がする。
「そう？　長生きするとその分ストレスも溜まるのよ。私だって唐突に『死にてー』とか呟くわよ？　そもそもね、真剣に死について考えたこともない奴らが多すぎるのよ。私は命が二つあるならば一つは自殺に使うわよ？　オジサンも科学的な探究心から自殺したくなったんじゃあない？」
そんな顕微鏡を覗く感覚で自殺する人間は多分いない。こればかりは断言できるぞ。冗談とも本気ともつかない近衛さんの言葉を聞き流しながら、僕は一足先に三階へ上がる旨を伝えた。一階の私室にも遺書らしき物はなかったし、輝叔父さんの自殺に対する違和感

を拭うには、三階の工作研究室を調べる必要がありそうだ。蒐集品が無事だとわかると、僕の興味は輝叔父さんの死へとシフトしていった。客観的に見ると、僕はもしかしたら結構薄情なのかもしれない。近衛さんも僕のことを指さしてそう言った。

「良いわ。見てきなさい。どうせ研究室なんて見ても意味ないし、私は下の動物を見て回って来るわ。なんだっけ？　あの鱗まみれの白い毛むくじゃら、あれ気に入っちゃた」

「キト・ヤートですよ。結構凶暴ですから、絶対に直接手を入れちゃあ駄目ですよ」

再度の忠告をして、僕は部屋を出た。しかしあんな不気味な生き物を気に入るとは恐るべし、近衛さん。あれの部屋の掃除だけはしたくないから、うまいこと近衛さんが担当してくれると嬉しいな。巨乳美女に任せるわけにもいくまい。

コンクリート造りの安っぽい階段に絨毯でも敷こうかと考えながら、僕は薄暗い三階へ向かった。手摺も何もない階段の横には物資運搬用のエレベーターが備えられているのだが、最大重量が七十五キログラムしかないから、本当に重い物は僕と輝叔父さんが手で直接運んだものだ。何処からか持って来たアイアンメイデンを三階まで運んだ時は比喩じゃあなく死人が出た。あれは凄惨だった。処刑道具だけど、使い方が圧倒的に違った。絨毯の色は赤だけは辞めるように、森嶋さんたちには相談しよう。

三階は、他の部屋と比べると部屋数が少ない。先のアイアンメイデンではないが、下手に扉があると入らない物を入れたり作ったりするからだ。因みに、暗室はまだわかるのだが、手術室まである理由を僕はしらない。

溶接機や溶断器、デスクトップサイズのミニ高温炉。各種ボルトやナットの棚。この部屋も恐ろしい程に、乱れがない。まるで仕事終わりに片づけをした後のようで、背中に薄気味悪い何かを感じた。単純に自殺するから片づけたのか、それとも……？　いや、それとも何なんだろう？　嫌われていた輝叔父さんだとは言え、流石に殺

されたのであれば警察に通報するだろうから、叔父さんは間違いなく自殺の筈だ。変なことを疑うのはよそう。
窓もどれも閉まっており、鍵までかけてある。ただその窓際の作業机には、普段いない生物が居座っていた。周囲の整頓された環境と比べると、その生物の持つ奇抜な色は酷く浮いて見えた。
そこにいたのは、オウムだった。鮮やかな緑色と派手な形の嘴のそれは、いつ見ても自然の中で暮らすのには不自由そうだ。しかし空を自在に飛び交う彼等にしてみれば、僕達人間がどれだけ彼等の不自由を憂いた所で何の意味もないのだろう。間抜け面をしたそれは、さして興味もなさそうに僕に一瞥をくれると、何事もないように毛繕いを始めた。
鳥が好きな輝叔父さんの中でも、言葉を喋るオウムは特にお気に入りだった。鳥の鳴き声と言うのは、産まれ持った物ではない。群れの仲間を真似て、オウムや九官鳥は発声していると言うのが通説であり、鳥類の知性はそうとう高い物だと言われている。叔父さんが鳥類を好んでいたのも、それが関係しているのかもしれない。
「オマエハヘイセイノシモヘイヘカ！」
僕が近づくと、オウムがそんなことを言った。叔父さんと漫才をしたこの一羽は、こうやって意味もなく言葉を発することもあれば、絶妙なタイミングでベストな言葉を発することもあり、こいつが賢いのか馬鹿なのかイマイチわからない。オウムだから、馬でも鹿でもないことくらい僕は知っているけどさ。と言うか、一体僕の何処にシモヘイへの要素があるのだろか？
文字通りの鳥頭が人懐っこく話しかけて来ることに煩わしさを覚えながら、僕は作業台の上に転がる小さな機械を手にした。ダイヤルの数が五つとやや多いが、ヘッドフォンが繋がれている携帯電話よりも少し大きなそれは、一見するとラジオに見えた。ヘッドフォンはいかにも安物っぽく、乱暴に扱ったのか傷だらけであった。作業中に音楽を聴くような人ではなかったことと、唯一このラジオだけが片付けられていないことが若干気にかかり、僕は台の周りを捜

索し始めた。
　引き出しの中に、輝叔父さんのノートを発見した。普通の大学ノートであり、表紙には何もかかれていなかった。僕は少しだけ緊張しながらそのノートを開く。最初に眼に飛び込んできたのは、日付と、動物の思考についての思考と書かれた表題だった。どうやら作業日報らしく、日付と時間ごとに、細かく自分が何をしたのかが書かれていた。二年前から飛び飛びに、暇を見つけては少しずつ作業していたらしい。作業日報とは言え、誰かに見せる予定もないノートの文章はどれも口語に近く、少々読みにくかったが、僕はどんどんとページを捲っていった。
　語弊を恐れずに記されていた研究内容を言えば、動物の言葉をわかるにはどうしたら良いのか？　と言うことがメインだった。しかし輝叔父さんの研究過程を覗き見るに、その最終的な目的地は生物の持つ感情や思考時の概念そのものにあるようだ。西洋哲学に被れていた風はなかったけど、叔父さんがそう言った方向にも手を出しているのは始めて知った。しかし錬金術師と呼ばれていたのだから、その辺りとの関係が濃くても不思議ではないのかな？　そんな実験の足掛かりとして、人間よりも脳が小さい動物、その中でも学習能力の高い鳥類の声を聴くことに力を注いでいるようだった。
　勿論、輝叔父さんは正規の科学者ではないので、その研究方法はどちらかと言えば科学的解釈よりも、オカルトに傾いている。僕の解読した古文書群の中から使えそうな呪術的要素を抜き出し、それを現代のラジオに応用しているらしかった。まさしく、錬金術師だ。だからといって、これが思ったような働きをしてくれるとは僕には思えないが。
　ノートを読み進めていくと、僅かながらも少しずつ進歩を続けていることが読み取れた。そして今更ではあるが、やはりあのラジオが動物の声を翻訳する機械であるようだ。ここ半年は、時間を見つけては調整を繰り返し、オウムに漫才を仕込んだのも、笑いと言う感情や概念が動物にあるかどうかを確認するためのものだったらし

い。まさか、ふざけた漫才にそこまでの深い意味があるなんて。多分、後付けの設定だろうけど。結構いい加減な人だったから、自分の都合のいいように日報と記憶を改ざんしているのだろう。

読み続けること早一時間。ノートの最後には機械が完成したと、歓喜に満ちた言葉が綴られていた。森嶋親子が階段を上って来る様子は一切なく、莫迦なオウムの突っ込みの台詞が三階に響いた。酸の抜けたコーラ祭りの伊藤博文とは一体何なのだろうか？　凄い気になってしまって、動物の声を聴くのなんて後回しにしたい気分だ。

良く見れば、叔父さんが自殺した日の前日の夜で日記は終わっている。翌日にクーちゃん（オウムの名前だ）の声を聴くことを楽しみにして就寝したようだ。僕だったら間違いなく、その場で小躍りしてオウムの声を聴きに行くのだが、叔父さんはオウムに気を使って明日に回したらしい。と言うことは、叔父さんは少なくとも前日に自殺する気がなかったと言うことになるのか？　三十を超えたおっさんが作業日報にエクスクラメーションマークを七つも連続して使っているのだから、自殺を使用などと欠片も思っているはずがない。

僕は、作業台のラジオ型の機会を手に取ると、壊れたヘッドフォンを耳にあて、作業日報に書かれた通りに動かした。ノイズを調整するためのダイヤルと、ヘッドフォンが少し壊れていた為、雑音が酷いがどうにか使用することは可能そうだ。深い考えは一切なかったが、輝叔父さんが自殺をする原因を知るには、これを使うことが一番の近道だと僕は理由もなく確信していた。

オウムの傍により、人間にするように「こんにちは」と話しかけ、僕はラジオのスイッチを入れた。

『――――』

そして、僕は気を失った。

そう、よくよく考えて見るべきだったのだ。少し頭を捻れば、わかるではないか。輝叔父さんが自殺した理由は、あの機械のせいな

のだと。首吊り自殺で恐ろしい死に顔になるわけがないことを、死後の硬直があるとは言え固まってしまった瞼や顎を動かすことくらいはできるだろうと。幾らなんでも、大人達が死体を見たくらいで何日も寝込むはずがないだろうと。何より、祖母に死体を見せずに火葬するなんてことが有るわけがない。

今なら叔父さんがどんな死に目に会ったのか、僕には理解できる。詳しくは話す気がないので、極々触りだけを伝えようと思う。

僕はあの後、丸二日眠っていたらしい。休日を寝て過ごすだなんて、産まれて初めてのことだったと思う。僕が目を覚ますと、やつれた顔をした母親とTシャツを来たラフな格好の近衛さんが言い争いをしていた。その原因はどうやら僕にあるようで、「薫君が起きなかったらどうするの？」「人殺し！」と母親が言うと、近衛さんが「だから、私のせいじゃあないって！　警察も調べているし、平気ですから落ち着いてくださいお母さん」と声を荒げる。二人はここが病院だと言う認識がないのだろうか？

僕の目が覚めたことに感涙する母親に頼んで部屋から出ていってもらうと、僕は近衛さんに事情を聴いた。母親よりも、近衛さんの方が正確に冷静に伝えてくれそうだった。

まず、近衛さんと大将さんは悲鳴を聴いたらしい。尋常ならざる僕の悲鳴に、二人は血相を変えて三階に駆けつけてくれたらしい。そこにいたのは、目と耳から血を流し絶叫し狂乱する僕と、僕の眼窩から零れ落ちた二つの眼球を啄むオウムの姿だった。あのラジオ型の機械は、作業机にぶつけられ間然に壊れてしまい、ノイズだけを撒き散らしていたそうだ。二人は常識的な手はずに則り、救急車を呼び、僕を病院にまで運んでくれたらしい。

「眼？　僕、普通に今、目が見えていますけど？」

近衛さんの説明を疑うわけではないが、現実として僕の瞳は普通に見えている。僕の問いに近衛さんは首を真っ直ぐに立てに振った。

「押し出されたのよ。薫君の目の下から、もう一つの目が産まれたのよ」

近衛さんの奇妙な台詞に、僕の頭は混乱を極めた。そんな様子を見かねたのか、近衛さんはジーンズのポケットから手鏡を取り出し、僕の顔の前に差し出した。そこに映る僕の瞳は、琥珀色をしていて黒目は濁りのない黒色でまるで猛禽類のそれだった。

「薫君。あそこで君は何をしていたの？」恐る恐る言葉を選びながら、近衛さんが伝えたいことを言わないようにしながら口を動かす。

「あの機械よね？　勝手に壊しておいたけど、アレはなんだったの？」

「……動物の声を聴く機械です」僕が正直に答えると、近衛さんは一層不思議そうに首を捻った。細くの意味を込めて、僕は言葉を付けたす。僕だって言いたくないんだ。ここまでで勘弁してくれ。「近衛さんも幾つか知っているでしょ？　声に出してはいけない言葉」

「ええ。そもそも発音不可能な呪文とかね。薫君が解読した『天解文章』一章の一番肝の呪文もそうじゃあなかったけ？」

「ええ。良い勘をしてますよ。正に、あのオウムが喋ったのは、それでした。直感でわかった、と言うより、確信していますよ」

そうだ、僕は聴いてしまったんだ。あのオウムの語っていた呪われた言葉を。恐ろしい響きと闇に包まれた暗黒の話を。動物達は、少なくともあのオウムは、餌のことも漫才のことも繁殖のことも何も考えていなかった。極々短い台詞には、日に出るべきでない恐ろしい呪詛が混じっていた。

「あの二十四ページに及ぶ文章を、あの鳥が喋ったの？」

「違います。あの機械は、正確には概念自体を捉える物です。言葉と言うのは、概念を伝える物です。赤と言おうと、レッドと言おうと、林檎の色と言おうと、本質には何の影響もありません。伝わってしまうんですよ、言葉の持つ意味が」

たった一言、『ゴハンチョーダイ』の一言に、あのオウムは、二万文字を超える意味を込めていたのだ。漢字一文字に、様々な意味が込められているようにだ。

「ちょっと待って、じゃあ、あのオウムにそれを教えたのは誰なの

？　誰も翻訳したことがない文章を、誰があのオウムに読み聞かせていたの？」

それの答えが、最も口にしたくない言葉だ。しかし内に潜む好奇心が、口を紡ぐことを許さなかった。もしかしたら、言葉にして吐き出さないと自分が壊れてしまうことを恐れた、自衛の手段だったかもしれない。

「オウムに限らず、鳥類は高い知能と学習能力を持っています。最も近い存在の言葉を真似ることで、鳥類は泣き声を覚えるそうです。ウグイスなんて、春先になると練習するくらいですからね。学習能力も反復能力も半端じゃあないんですよ」

「まさか……」近衛さんの顔が青ざめる。本当に勘が良い。

「預言書ってあるじゃあないですか。あれって、書いたのは人ですけど、その内容は天からの啓示なんですよ。声なき形なき姿なき存在の言葉を記しているだけです。そして、あの天解文書も書いたのは人間ですが、それを書くように求めたのは、青き海と空の支配者……それこそ名前も言えない、《恐るべき者》だと言われています」

後日、僕は退院すると同時に、父親に輝叔父さんが死んだ時の状況を訊きに行った。父は何も喋りたがらなかった。説得を無理と諦めると、僕は大将さんに連絡をし、警察から叔父さんの最後が載った写真を見せてもらった。厳重に封筒に入ったそれを持つこともおぞましいと、若い警察官は吐き気を堪える表情でそれを僕に手渡した。

渡された封筒を開け、写真を取り出す。そこに写っていたのは、苦悶と恐怖の表情で血の涙を流す輝叔父さんの顔と、首から下にグロテスクな触手と羽を生やした奇妙な身体であり、輝叔父さんが自らの姿を呪い、自殺したのだと確信させるには十分だった。恐らく、輝叔父さんは完璧に聴いてしまったのだろう。機械の調子が悪く、ほんの一フレーズをノイズ混じりに聴いただけだから、僕は瞳が生え変わるだけで助かったのだ。僕の解読が正しければ、天解文書の

一章に書き綴られていたのは『生物が目指すべき新たなる領域』であったはずだ。あの吐き気を催す奇妙な羽毛まみれの軟体の身体がそうだと言うのだろうか？　僕は静かに写真を返すと、走って輝叔父さんの屋敷に戻った。

身体は羽のように軽く、瞳以外が人間外の何かに変わってしまったと悟るには十分だった。短距離走のスピードと、持久走の体力で走った僕は、山道を真っ直ぐに突っ切ることで車よりも早く屋敷に着くことができた。

屋敷の何処を探してもあのオウムはおらず、あの恐ろしい言葉を訊くのが僕で最後になることを祈りながら、叔父さんの作業日報を書斎にあった古いライターで燃やした。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0063w/

フォークスロア

2011年8月22日03時32分発行